

大陸（中支）

青春を捧げた軍隊生活の

思い出（その三）

福島県 大竹 清 照

嶺添を攻略する頃は、友軍機が時々飛んで来て我が軍の攻撃を支援してくれたが、その後どういふことが最近さっぱり姿を見られなくなった。それに反して敵のP51戦闘機が頻繁に飛来して機銃掃射を仕掛けて来る。部隊はその度に退避しなくてはならず、部隊の行動も慎重に行われるようになった。従って夜行軍が多くなって来た。

二日程歩いて大隊は、大沖扨という部落に入っ

て次期作戦の準備のため一週間程の大休止に入った。我が中隊も部落外れの民家を三軒程占領して宿営することになった。そして差し当たり食料の調達である。第一線の戦闘部隊の宿命とでも言うか、後方からの食糧補給を全く受け入れられないというのが現実であった。そのため行く先々の部落で食糧を徴発しなければならなかった。いわゆる蔣介石給与に頼らざるを得なかった。

南支は気候も良く温暖で、米も二毛作ができる所でさぞ農家も豊かで作物も豊富だろうと予想して来て見たら、案に相違して食糧難で大変苦労した。中国の農家では夕食時には老母が大きな鍋に赤い飯を炊いて置いて、家中の女、子供は全員避難していて、夜になったら誰かが取りに来て避難

した家族の所まで運んで行くという。これに当たった腹の空いた我々には天の恵みであり、分隊に持って来て、見つからなかった分隊等にも分けてやったものだった。赤い米飯はこの地方特有の産米であろう。とても粘りがあつておいしかった。

広東省から広西省に入ると山岳地帯が多く、部落も小部落で徴発する物も僅かであったが、これも致し方ないことだと思つていた。今度は大沖扞というかなり大きな部落に宿営と聞いて「シメタ、今度こそは苦勞はないだろう」と喜んで到着したがどこもかしこも空家で何も残してない。食糧を探すには苦勞しなければならぬ。しかも一個大隊約一千人弱位の隊員が一週間も宿営するから三度の食糧を獲得すると大量の食料が必要で、大沖扞の部落だけでは部隊の食糧は確保できないのである。各中隊は付近の部落まで足を運んで食糧探しに奔走する。

我が中隊も各小隊毎に徴発隊を繰り出して、食

糧集めに掛けたのだ。我が分隊では粿カキを見付け小さな甕ウツに入れて棒で搗いて食べたものだった。

ある日、自分は徴発班長となり兵隊七、八人を連れ、山中の避難した農民の場所を探そうと出かけたがいくら探しても見つからない。すると大きな岩が幾つも重なっている岩の隙間から白い煙が立ち昇っているのに出会った。「これは変だぞ、おい、皆で一番上の大きな岩をどかして見よう」と皆でどかしたら、その下は洞窟になっているようだった。誰か中に入って食べる物があるかどうか見て来る者はいないかと言つたが誰も入ると言う者はいない。「よし俺が入るから、外の警戒をしてくれ」と言つて穴の中へと入つて行つた。

中は真つ暗でローソクの光がともつていた。かなり広い鍾乳洞のようで、ローソクの明かりだけでは隅々までは探索できない。中には年寄りと女子供が居るようで、中では飯も炊けないようだ。

部落からこっそり飯を運んで来るのかも知れない。長居は危険なので外に出て皆に説明をする。

帰隊の路を歩いて来ると、向こうから牛の鳴き声が聞こえて来た。「おい！ どこかでべこ（牛）の鳴き声がするぞ」と。牛は農民にとって農作業には絶対に欠かせない労働力なのである。だから牛まで避難させたのだろうが、背に腹は替えられない、その牛を引っ張って数時間掛かりで中隊に帰って来た。ところがこれを料理する者が誰もいない。自分は入隊する前、山村道場と言う所で小家畜の肉の解体技術等は習ったことはあったが、牛の解体については初めてであるが「私がやりませう」と言って、時間は掛かったが何とか解体することができた。何と言っても一頭だから中隊全員が牛肉にあり付きスタミナをつけたのだった。第一戦でなければ到底できないことである。

南支に来て一番驚いたことは部落の形態であった。中支の裕福な家は白壁の土塀等で囲ったもの

が多く見られたが、ここ平南地区の部落は大小の相違はあっても部落全体を土塀で囲み、四隅には必ず望楼が造られていて、常時外敵に備え防戦ができるように構築されている。しかも白壁造りの家は全くまれで、大部分が赤土を固めた土煉瓦造りであった。

山の上から見渡すと部落の周囲はほとんどが田圃でその外郭が畑のようだ。十月も下旬になるとこの付近の水田は既に刈り取りも終わったのだろう。田圃の中は乾いているが、もしこれが四、五月頃で満々と水を張った水田であったら、部落の外壕の役目をして部落に侵入することは容易ではない。部落がこのような防禦的構造に徹するにはそれなりの理由があったようだ。

広東省は大部分が漢民族であるが、中国の戦国時代よりしばしば両民族間では侵略的抗争が続いたと言う。農民達も部落を挙げて自営手段を講じなければならず、このような建物や部落造りとなったのだと言う。広西省地区の自警団組織の決

定的な団結力は古来から継承されたもので、一朝一夕にできたものではないのであると、広東から一緒に連れて来た苦力達の話である。私達が広東省の者だとわかると殺されてしまうのだと言うのであった。

十月十五日、中隊は大沖扨を出発、大隊の右翼を尋湖（桂平）に向かって前進を開始した。その頃蒋介石の正規軍は英米の新兵器を装備し、米軍が指揮を執り尋州桂平周辺に四個師団の大部隊を集結、一大防備態勢を執っているとの情報であった。我が第三大隊はここから「憲」兵団の指揮下に入り、第十中隊は尖兵となり、しかも自分達は尖兵分隊として平南の丘陵地帯を猛進撃して行った。

山の裾の細い道の右側を鬱江という川が流れている。桂平県城は対岸にある。渡河するのに順番を待つ。対岸の敵は猛反撃をしている。渡河にはかなり難渋をしているようで、対岸で待っている。

自分達は中食の飯盒炊餐の食事をし終わって二、三十メートル先の小川で飯盒を洗っている、すぐ前を一人の兵隊が山の中の方に歩いて行った。便所にでも行くのかと思つて気にも止めないでいた。

「オーイ！ 出発だ」と声を掛けられたので軍装を整え渡河点へと歩いた。その頃は先に渡河した部隊が敵を撃退したらしく銃声も止んでいた。自分達は工兵隊の船で対岸に渡り、部落を見付け、今夜はここで宿営することになった。大隊本部も渡河を完了したようだった。

その時、今は大隊本部に転属した元初年兵教育の助教だった桜井伍長が、向う岸へ渡つて「六号無線の大竹清春という兵隊が不明なので探しに行くのだ」という、自分はその時ハツと思ひ出した。「自分が中食後の飯盒洗いをしていた時、知らない兵隊が山の中の方に歩いて行くのを見ました。今探している兵隊はその兵隊ではないだろうか」と助言した。

やがて桜井班長はじめ大隊本部では大声で呼び探したが、応答がなく、暗くなって搜索を打ち切り帰って来てしまった。逃亡したのか捕虜になったのか、その後の彼の消息はわからない。他の部隊でもこのような事件があったという事も聞いていた。

十月十九日頃から敵は大反撃に転じて来た。戦闘機は常時飛来し、その都度、我が中隊の足は止められ、予定の通りの進撃はできず、部隊の幹部はイライラする毎日であった。この頃、第三大隊の第九中隊は敵状と桂平方面の地形偵察の命を受け、桂平対岸の鬱江岸より単独渡河を執行していた。これを知った大隊長橋爪少佐は、直ちに部下を督励して尋州対岸の渡河点に急行した。

P 51戦闘機は機銃掃射を浴びせ、我が軍の渡河を阻止せんとする。自分達は対岸の松林の中に身をかくし、敵機の攻撃をさけて待機していた。対岸の敵も盛んに銃砲の雨を降らせている。真つ暗

な闇の中に銃砲火の火花が見える。

第二十二師団の工兵隊はこの銃火の中で必至に渡橋工事を敢行している。縁の下の力持ちとはこの事であろう。やがて東の空が白み始めた。渡河した先頭部隊が敵を駆逐したのか我が第十中隊が渡河をはじめた頃には敵の銃声も聞こえなく、難なく対岸に渡る事ができた。

平南に進出していた我が八十五連隊は桂平方面に進出すべく命令が下達された。また独混第二十旅団を貴州方面に急遽反転させた。旅団は、丹竹の攻略戦で激戦を重ね携行弾薬のほとんどを使い果たした。丹竹に進出を果たしたが補給部隊の設置には至らず、「川」挺身隊より融通を受け鬱江を強行渡河して桂平（尋州）を落した。そして十月下旬には、同地西北部の丘陵地帯を占領して、軍の主力の丹竹及び平南地区進出の援護態勢に入った。

兵団では各部隊に柳州に向かつての次期作戦の

準備をさせた。憲部隊は「正」部隊の先遣隊主力を併わせ、貴県付近の敵を掃射して陥落せしめた。我々第八十五連隊第三大隊は連隊の後衛に就き貴県の街へ入っていった。ここ貴県の街は砂糖の産地として有名な街で至る所に大きな竹籠に黒砂糖が十センチ角位に固めた黒砂糖が山程あった。今まで糖分には有り付けなかった我々は、背囊に背負う程積み込んで、一時間位の休憩の後また新たな敵を求めて出発した。そして部隊主力は柳州に向かって進行した。

自分は今度は中隊の第三小隊（小松隊）で連隊の弾薬行李班駄馬部隊の護衛隊として部隊の最後尾を遷江を目指して平坦な軍行路を進んでいた。広い草原の道を駄馬部隊は長い隊列を作って黙々と歩いていった。我々小松小隊は駄馬部隊の後方百四、五十メートル地点を見失わない程度の距離を保ちながら行軍していた。

貴県を出発して三時間位経っていたらうか、空は青く澄んで陽差しは一段ときびしかった。前方

左手の小高い丘から突然「スー！」と音もなくP51戦闘機が姿を現した。一機、二機、三機姿を現したと思ったら「キーン！」と言う金属音の爆音で、一番機が駄馬部隊を見付けて翼を左右に振って旋回すると、二番機、三番機もぐるりと旋回したかと思うと「バリ！バリバリ！」と駄馬目掛けて機銃の雨を降らせて来た。バタバタバタと駄馬は倒れ、あるいは弾薬箱を腹の下に廻して逃げた馬もいたが、ほとんど全滅状態にやられてしまった。敵機は駄馬部隊の攻撃をすませると、今度は平原に伏せている我々に向かって「バリバリ！」と機銃掃射をして来た。「もう駄目だ」私はこの状況から万に一つの命は無いものと、この時ばかりは覚悟した。

一番機、二番機、三番機が一文字になって頭上から襲って来た。私は咄嗟に軽機関銃を構えるところから「スー」と白い煙の尾を引いて四キロ程彼方の平原に墜落した。二番機、三番機は墜落した一

番機の上を旋回して墜落を見届けると、そのままどことなく飛び去って行った。「助かった！」私は夢中で軽機を射っていたのだが、爆音が去って初めて吾れを取戻した感じであった。それにしても敵機を撃退することができると望外の喜びであった。小隊は思わず「万歳！」して喜び合った。

次の日早速、「連隊会報」が出て「小松小隊、敵機一機撃墜せり！」と発表されて、小松小隊は殊勲甲となった。

小松小隊長戦死と小隊の危機

柳州会戦に出撃した第二十二師団であったが、重慶正規軍の大反撃や米軍機による猛爆撃を排除しながらの進撃で、師団は本部を武江付近の良江墟に進出させるに精いっぱいであった。第二十三軍の本隊もやつの事で武江の渡河を終わり、対岸の来賓まで進出したが柳州に入場することができないうちに、柳州方面の戦闘は終結を迎えてし

まったのである。

しかし第二十三軍としては隸下の第百四師団が柳州県城を占領したことで辛うじて面目を保ったが、第二十二師団としては柳州まで到着することができないうちに作戦が終了したことは誠に残念な思いをしたものである。だが重慶軍の主力部隊は柳州よりもむしろ外郭県城の桂平や貴県方面に主力の全力を投じて防衛に当たっていた感があり、桂平賓県方面の敵と真正面に当たり戦闘を展開した。

独立混成第二十三旅団や第二十二師団の各部隊の奮戦こそが、この柳州作戦を成功させるに絶対的な役割を果たしたことは否めない事実であり、また武江の渡河を連隊長が独断で断念をし約二十五キロ程南西の清水江を渡り、鄒墟付近まで進出していた第八十五連隊は、柳州会戦終了に基づき現地から急遽反転して賓陽に向かっていた。これは第十一軍司令官からの命令を受けた第二十二師団の意図で、第八十五連隊に賓陽の占領を下命さ

れたものと判った。

上層部の意図はどうあれ、我々兵隊は来る日も来る日も猛行軍と戦闘に明け暮れ、身も心もクタクタになるようだった。蒙扨の戦闘で前原准尉が戦死後、我が第十中隊は小松曹長を第三小隊長に、昭和十九（一九四四）年十二月三十一日、第三大隊は永淳の東北方約七キロの地点に到達していた。ちよつとした部隊で大隊はここで宿営することになった。我が中隊の兵隊達も久しぶりに身体の疲れを取ることができた。

記念すべき昭和二十年の正月元旦を、名も知らぬ部落で迎えた兵隊達であったが、新年を迎えたという感慨などはさらさら湧いて来なかった。ただ明日の命はどうなるのかと思う者が多かったようだ。

一月三日、大隊は同地を出発して横県に向かつて行軍して行った。横県が近くなる地点まで来ると右手に小高い丘陵が連なっている。その山裾地

帯を中隊は進んでいた。第三小隊の小松小隊は中隊の最後尾を行軍していた。右手の方に高い山脈が続く所に差し掛かった時、突然後方より敵の攻撃を受けた「ビューン！」と敵弾が頭上をかすめてゆく。道路の真中を歩いていては危険なので山裾に沿って避難しながら進んでいた。

前方からの攻撃と違つて後からの攻撃を受けるというのは本当に気味の悪いものだ。小隊長の小松曹長はこの敵の弾雨の中を各分隊に注意と指示を与えながら悠々とした態度で道の真中を歩いている。兵隊達は皆「小隊長、危ない！」と声を掛けた。「ビューン！ ビューン！」と敵弾は一段激しくなり、また「危ない！」と声掛けたとたん小松曹長はバツタリと倒れてしまった。

その内前方にも敵が現われて中隊は側面は山、前後に敵の全く袋の中の鼠のような状態になってしまった。我々は戦死した小隊長の遺体を急いで山麓の水車小屋に担ぎ入れると、水車小屋の横手の山へ（高さ五十メートル）と駆け上がって行つ

た。山頂に陣地を構えるため、先行した者から
蝸壺式の壕を掘る。

最初に第一分隊が山頂に登り軽機の陣地を作る
ことになり、三浦上等兵が軽機射手として山頂に
登り、山頂よりやや前方斜めの所に軽機陣地を造
り、ここから下より昇って来る敵を射撃し始め
た。しかし敵はすでにそれを察知してか右手前方
の高い山に狙撃手を置き軽機を狙い射ちした。た
ちまち三浦上等兵は大腿部に敵弾を受け負傷して
しまった。

軽機がなくては山を護ることができない。自分
は早速三浦上等兵と交替して、斜面を登って来る
敵に軽機を乱射したところまたもや狙撃手が自分
に向かつて射って来た。弾丸は軽機の右脚に当た
り自分の右耳たぶをかすめて「キュン！」と右耳
が聞こえなくなった。

「これは危ない」とこの壕から飛び出て、山頂
に二つある大きな岩陰から軽機を乱射した。ここ
からは敵の狙撃には見えない位置であった。やが

て夜に入って戦闘は小康状態に入ったが、我々は
蝸壺掘りで一夜を明かしてしまった。

夜明けと共に敵の大攻撃が始まった。聞くところ
によると敵は重慶正規軍で約三千人位の大部隊
で指揮官は米兵だと言う。敵は豆腐屋のような
ラツパを合図に「トテ、トテ、トテ」と左右交互
にゾロゾロ山を登って来る。自分は夢中で軽機を
射ちまくった。どの位の時間戦っているのか、今
何時頃なのか夢中で軽機の引金を引いた。それば
かりか、自分の両隣に誰がいるのかさえハッキリ
覚えていない。ただ向かって来る敵に軽機の引金
を引いていた。

やがて弾丸が無くなって来た。分隊の小銃手の
間を駆け回って弾丸を集めてくる。しかしその弾
丸も射ち尽くしてこれ以上敵が迫って来たら銃剣
で立ち向かう外は無いと覚悟を決めていた。その
頃から夜になった。

交替で山を下りて水車小屋に引き揚げた。明日

は白兵戦になるだろう。それぞれ覚悟を決めて浅い眠りに入る。自分は小隊長の小松曹長の脇で眠った。身体がすっかり冷たくなった遺体、小松曹長の顔は和やかで苦悶の影さえなかった。

明け方である。眠りを破って「ドカーン！ ド

カーン！」と味方の山砲の発射音で目をさます。外に飛び出して見ると山砲隊の中隊長が馬上で砂糖きびを嚙じりながら、部下の山砲隊の指揮を執ってる姿が目に入った。さすがの敵も山砲を打ち込まれてはたまらない、間もなく退却して行った。山砲隊は約四、五十キロの道を休憩無しに駆け付けて来たのだと言う。本当にまた命拾いをしたものと感謝したのだった。

自分は我々の第三小隊だけが敵に囲まれて苦戦したとばかり思っていたが、とんでもない事で中隊いや第三大隊その物がとてつもない重慶軍の大部隊に遭遇し、全滅寸前の危機に直面していたのだと言う。第三大隊の危機の知らせを受けた連隊は、連隊長能勢大佐を先頭に第八十五連隊の総

力を挙げて賓陽から駆け付けて来たのであった。この戦闘は横県付近の戦いとして戦史に残る程のものであったのである。

—つづく—

〔編注〕 本編は、第XIII巻に掲載された「青春を捧げた軍隊生活の思い出」の続編である。

【解説】

歩兵第八十五連隊

連隊長 陸軍

大佐 河野

省介

歴代 初代連隊長

大佐 田村

節藏

二 //

大佐 佐々木真之助

三 //

大佐 羽鳥 長四郎

四 //

大佐 能勢 潤三

昭和一三・四・二五

編成 完結

連隊本部

歩兵砲隊 通信隊 宇都宮

第一大隊

水戸

第二大隊

高崎

第三大隊

松本

編成は宇都宮師団管区

昭和一三・七・一四

初代連隊長 田村大佐 東京に於軍旗拝受

昭和一三・八・一五 中支派遣大阪港出港

八・一九 上海上陸

爾後 昭和一九・五・二に至る間中支浙東地区に在りて作戦、警備

昭和一九・五 南支那に転進のため駐屯地

出発

五・二三 連隊主力上海出発

六・二 連隊主力南支那広東省黃

甫上陸、爾後南支那広東・広西省の作戦警備

に従事する。

南支那転進の際、在中支並びに途中台湾に於ける入院患者等にして追及不能なりし者それぞれ最寄り部隊に転属せる者（詳細不明）

（昭和二〇・一・三 小松小隊長戦死）

昭和二〇・二

上旬より中旬に亘り仏領印

度支那に転進、爾後、北部仏印に在りて警備

に従事す。仏印転進の際、広東方面に後送せ

られる者及後方残留者にして追及不能なる者はそれぞれ最寄り部隊に転属せる筈。

昭和二〇・七月下旬 連隊主力シヤム国移駐のため転進す。

昭和二〇・八・九 連隊主力シヤム第三管区

ナコンナコン

ナコンナコン県ムックダーハン附近に集結。一部はシヤム国ウドン附近に集結す。

昭和二〇・八・一四 終戦

終戦時に於ける部隊状況

連隊主力はムックダーハン附近に一部はラ

ドン附近に集結。後発要員として北部仏印

に残留せる小林大尉以下三七六人（入院患者を含む）は、終戦に伴い第二十一師団長

の指揮下に入り、昭和二十一年一月一〇日

核兵団に転属す。

昭和二〇・九月上旬 連隊主力シヤム国ウボン
県ウボン市に集結。ウドン附近に在りたる一
部ウボンに集結す。

昭和二〇・一二月月上旬 連隊主力ナコンナヨー
ク集結す。

終戦後ナコンヨークに於いて、約三〇〇人、
主としてビルマ方面より後退せる人員、当連
隊に転属す。

昭和二一・三・五 シヤム国転進際、配属中の
山砲第五十二連隊第一中隊及該連隊盤谷先発
要員一六〇人、当連隊に転属す。

南支から中支へ

召集の想い出（その三）

愛知県 竹内 章

木村副官からは、別れて以来何の連絡もない。
心配であるし困ってしまった。海州の本隊に連絡

しようとしても通信網は破壊され不通だ。鉄道通
信をと思つて徐州駅へ行つても、これもまた同様で
駄目である。鉄道は八路军が住民に破壊され、い
つ復旧するか不明で心もとない。津浦線はたまに
列車が入ってくるので徐州駅で情報をキャッチで
ある。

山海関方面より帰ってくる兵隊の話によれば、
ソ連は、昭和十六（一九四一）年四月十三日に、
日ソ中立条約が締結されているのに昭和二十年八
月八日、突然に、日本に対し一方的に宣戦布告
し、満州国に雪崩れこみ、軍事及び企業などの施
設を破壊し、収集するなど、まるきり火事場泥棒
同様で、関東軍も無抵抗状態であるとのことだ
であった。隴海線が一部開通した様子であるが、生
命の保障はないとの事である。

木村副官と連絡がとれたので状況を報告し、腹
を決め、海州へ帰隊することにした。徐州駅に行
くと、同様に待機の各部隊の連絡兵が集結をして
いたので心強く思った。早速乗車し海州に向か